フランス人日本語学習者の名詞の音調

法貴則子

要旨

フランス人学習者の、日本語発話における名詞アクセントの習得を調べるために、学習者の音調（発話時のピッチの変動）をピッチ曲線と聴覚印象により調べた。その結果、名詞が平叙文文末に置かれた場合と単語リストの読み上げの場合には、名詞の最終音節が低くなる傾向が見られ、アクセント正用率では、頭高型アクセントの正用率が高く、平板型アクセントの正用率が低かった。名詞が文中に置かれた場合と、名詞の１語問い返し疑問文の場合には、名詞が平板化する傾向が見られ、頭高型アクセントの正用率が下がり、平板型アクセントの正用率が、少し上がった。また、平叙文文末に置かれた、同じ名詞の音調は、かなり固定していた。つまり、フランス人学習者の名詞アクセントが、文における名詞の位置、イントネーションによって、影響を受けていることがわかった。

［ｷｰﾜｰﾄﾞ］フランス人学習者　音調　アクセント　イントネーション　習得

0.　はじめに

1989年から始まった重点領域研究「日本語音声」（研究代表者杉藤美代子）により、日本語の韻律特徴が明らかにされつつあり、フランス人を含む外国人日本語学習者の日本語音声における、母語の韻律の干渉に関する研究等も行われてきている。本研究は、これらの研究成果をもとにし、また新しいデータも加えて、フランス人日本語学習者の名詞アクセントの習得状況を明らかにすることを目的に、これらのデータを分析し直したものである。

分析するのは、単語リスト中の名詞、平叙文文末の名詞、文中の名詞、名詞の１語問い返し疑問文の音調であり、異なる文環境、イントネーションの名詞アクセントがどのように実現されているかを観察する。学習者の韻律における中間言語を観察することにより、アクセント、イントネーション教育に必要なものが見えてくると思われる。

なお、ここで言う音調とは、学習者の発話に現れた、アクセントとイントネーションによるピッチの変動全体である。

日本語では、単語ごとに高低アクセントが決まっており、そのアクセントを保ったまま、その上にイントネーションがかぶせられる。一方フランス語においては、単語に固有のアクセントというものは存在せず、その音調はイントネーションによって決められる。このため、フランス人学習者にとって、アクセントの意識を持つことは難しいと考えられる。中川・法貴(1994)によると、同一フランス人のフランス語発話で、平叙文文末に名詞が置かれた２文"C'est (　)."と"Oui,(　)." において、(　) 内に同じ名詞を入れると、その名詞の音調が２文において異なって発話されていることが多く観察された。フランス人４人のうち１人は10単語全部が、どちらの文でも同じ音調であったが、ほかの３人は40% から80% が異なる音調であるということが、ピッチ曲線、及び聴覚印象によって観察された。また４人の音調もそれぞれ違うものであった。このような傾向が、日本語にも用いられるとすると、日本語の単語アクセントが実現されないことになってしまう。そして日本語の名詞を発話する度に、音調が変わるという問題が生じる可能性がある。

以上のようなことから、フランス人学習者の名詞の音調について、次のような予測を立て、それが発話においてどうなっているかを調べる。

①フランス人学習者の名詞のアクセントは、イントネーション、文環境によって影響される。

②同じ文環境に置かれた同じ名詞であっても、発話する度に音調が変化する。

フランス人の日本語の韻律については、中川・中川(1993)において、フランス語と日本語の韻律の対照研究及び、フランス人学習者１名の日本語音声の韻律に見られる母語干渉についての分析が行われた。その結果、単語リスト、平叙文、疑問文などでフランス語の韻律の干渉が観察された。

日本人の１語問い返し疑問文の音調については、鮎澤(1992)において入念な分析がなされ、文末のピッチの上昇がいずれの場合にも見られ、アクセント型および、アクセント核の位置によって、上昇の仕方にはいくつかの型があると報告された。またフランス人の１語問い返し疑問文について鮎澤(1994)は、フランス人学習者が日本語１語問い返し疑問文において、異なったイントネーションパターンを使っており、そのパターンは必ずしもその学習者が母語の疑問文で使用するパターンとは一致しないと述べている。

フランス人学習者の日本語発話中の、文環境による音調の違いについては、

中川・法貴(1994)で、文環境によって音調が左右されているのが、観察された。すなわち、文末では平板型アクセントの正用率（東京語として適切な音調であった割合を便宜上、正用率と呼ぶ。但し句頭上昇は正誤判断の対象にしていない。）が低く、頭高型、中高型アクセントの正用率が高いが、文中では平板化の傾向が見られて平板型アクセントの正用率が上り、頭高型、中高型アクセントの正用率が低くなった。以上の研究は読み資料によるものであるが、法貴(1994)の自由発話中においても、文中での平板化の傾向が多く観察された。

本研究はこれらの研究の成果をふまえながら、学習歴の異なる４人のフランス人学習者による、名詞アクセントの習得状況を観察し、習得上の問題点を探るものである。

1. 調査の概要

1.1 被験者

被験者はフランス人日本語学習者４名である。（表１参照）

（表１） 学習者データ

学習者	出身	性別	年齢	滞日歴	学習歴	職業
FRF01	ｵﾙﾚｱﾝ	女	30代	14年	ﾌﾗﾝｽの 大学で 3 年	語学教師
FRM02	ﾅﾝﾁｭｱ	男	20代	2年	東京の 大学で 2 年	学生
FRM03	ﾊﾟﾘ	男	30代	4年	東京で 2 年個人ﾚｯｽﾝ	銀行員
FRM05	ﾄﾈｰﾙ	男	20代	8か 月	ﾌﾗﾝｽで 6 年	研究員

1.2 発話資料と実験の方法

アクセント型の違う16の名詞単語リスト、及びその名詞を４種類の文の中に代入した日本語の会話文（鮎澤・谷口1991）を学習者に読んでもらい、 DAT録音機(SONY TCD-D10)を使って録音した。（表２参照） 資料として２回目に録音した単語リストと、表２の下線をほどこした４文に16名詞を代入したもの４人分を用いた。（但し15名詞の資料しかとらなかった人が１人いたため、総資料数は単語リストが 16x3+15＝63, 文が16x4x3+15x4=252） この資料を「音声録聞見」（今川・桐谷1989）のピッチ曲線、及び日本人２名の聴覚印象により

分析した。また日本語の録音の前に、フランス語の単語リスト及び会話文を録音しており、その分析も同様に行い、日本語分析の際に、参考にした。

（表2）分析に使った単語リスト及び会話文

単語リスト
平板型（3）　でんわ、がっこう、おくりもの
尾高型（2）　やま、じびき
中高型（7）　はなや、せんせい、あさごはん、アイスクリーム、こうとうがっこう、ゆうびんきょく、がいこうかん
頭高型（4）　ねこ、ほん、めがね、ほんばこ

会話文（下線部は分析に使った文）
A：あれ、なに？
B：どれ？
A：あれ
B：あれ？あれは（　　）。
A：（　　）？
B：そう（　　）。　（　　）のしゃしん。

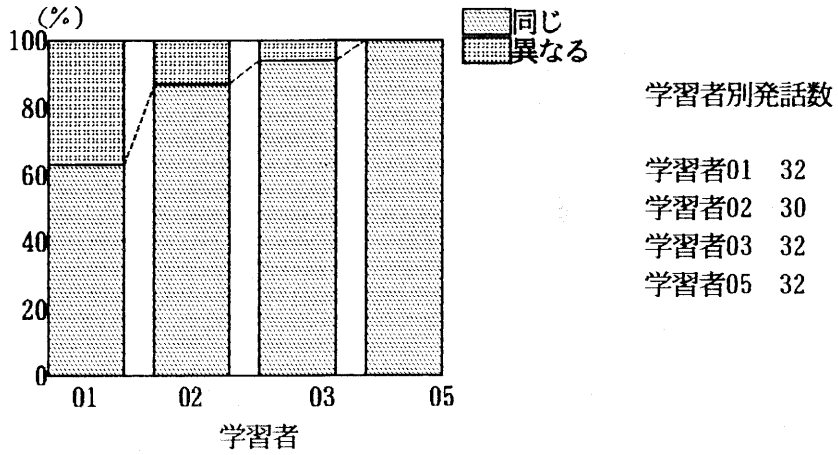
＊本研究では平板型と尾高型を同じグループとして扱った。

2. 結果

2.1 同じ文環境における名詞の音調：平叙文文末の名詞

2.1.1 音調が同じであったか異なっていたかの割合

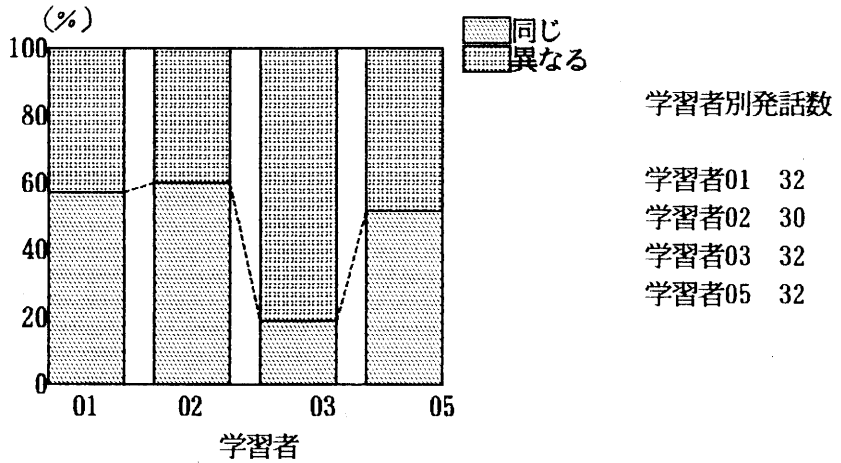
名詞が平叙文文末に置かれた2文、「あれは（　　）。」と「そう、（　　）。」の（　　）内に同じ名詞を入れたときの、名詞の音調を比較する。16個の名詞のうち、2文において、2回とも同じ音調で発話されたか、異なった音調で発話されたかの割合は（図1）のとおりである。



（図1）同じ文環境で名詞の音調が同じであったか異なっていたかの割合

学習者01は、16の名詞のうち、63% が同じ音調であるが、学習者05の場合は、16名詞全部が２文において同じ音調、学習者02、03 も約90% の名詞が同じ音調である。多少の個人差はあるが、同じ文環境の名詞の音調は、かなりの割合で一定していると言うことができる。

次に、これと比較するために、中川・法貴(1994)で分析した、異なる文環境における名詞の音調を（図２）に示す。分析に使ったのは「あれは（　　）。」（文末の名詞を含む文）と、「（　　）の写真。」（文中の名詞を含む文）の（　　）内の名詞の音調である。



（図２）異なる文環境で、同じ名詞が同じ音調であったか異なっていたかの割合

（図１）、（図２）を比べてわかるとおり、学習者01はほぼ同じであるが、ほかの３人は、同じ文環境での方が、異なる文環境に比べて、名詞が同じ音調になる割合が高い。つまり、文環境が変わることによって学習者の名詞の音調は変化している。特に、学習者03においてその傾向が顕著に見られる。

2.1.2 平叙文文末に現れやすい名詞の音調

では、平叙文文末の名詞において現れやすいのはどんな音調であるのか、音節数別にその傾向をまとめる。（表３）ここで言う音節数とは、フランス人にとっての音節であり、例えば４拍の名詞「せんせい」を２音節と数える。フランス語で音節を数える場合、長音、促音、撥音を１音節と数えるからである。

（表３）平叙文文末名詞の音節数別音調の傾向

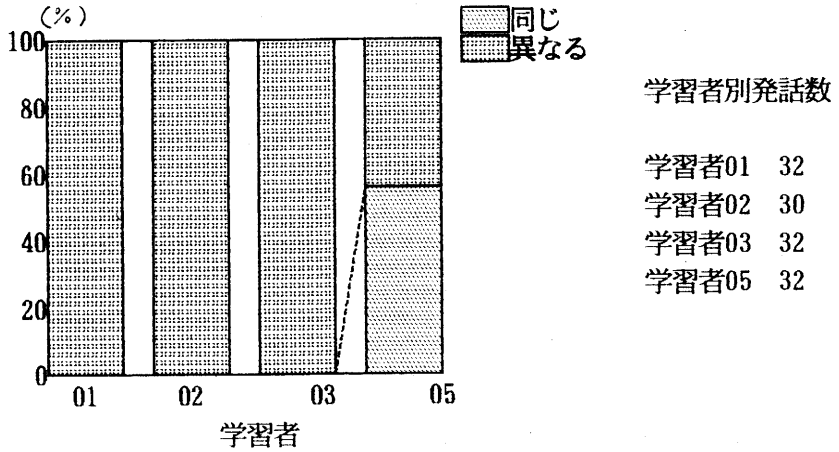
２音節名詞 (5 名詞)	◆◆ (88%)	
３音節名詞 (5 名詞)	◆◆◆ (68%)	◆◆◆ (26%)
４音節以上の名詞 (5 名詞)	(◆)◆◆◆◆ (50%)	(◆)◆◆◆◆ (35%)

２音節名詞５つが、「あれは（　　）。」「そう、（　　）。」において、４人の学習者に頭高で発話された割合は88%(35/40)であるが、３音節以上の名詞については、複数の型が見られた。１人の学習者が、両方の型を使っている場合もあれば、どちらかの型を好んで使う場合もあった。しかし、平叙文文末の名詞において、その音節数にかかわらず、最終音節が低くなることは、全体に共通して見られる現象である。このような音調は、フランス語の平叙文文末の音調特徴の干渉と思われる。

2.2　単語リストと１語問い返し疑問文中の名詞の音調

2.2.1 同じ音調であったか異なる音調であったかの割合

まず、１語問い返し疑問文の音調と、単語リスト中の名詞の音調を比べることによって、疑問イントネーションが音調をどのように変化させるかを調べた。単語リスト中の名詞と問い返し疑問文で音調が同じだったか異なっていたかの割合を（図３）に示した。



（図３）単語リストと１語問い返し疑問文中の名詞が同じ音調であったか、異なっていたかの割合

学習者01、02、03は、16の名詞全部の音調を、単語リスト中の名詞と疑問文では変え、疑問文では、上昇イントネーションを使っている。学習者05は16の名詞のうち12名詞は疑問の上昇イントネーションを使わず、そのうち 9名詞は単語リスト中の名詞とほぼ同じ音調であった。しかし、ピッチ曲線で観察すると、疑問文では語頭から語中にかけての上昇幅が大きいことが観察された。なお、フランス語の１語問い返し疑問文において、学習者03、05 には、文末上昇を伴わない音調がいくつか見られたが、その他の場合は、文末上昇調が観察されている。

2.2.2 学習者の１語問い返し疑問文に観察された音調

学習者が使用した日本語の問い返し疑問文の音調には４つの型が見られた。

①上昇型　最終音節に向かって上昇していく型で、漸次上昇するものと句頭上昇の後、一旦平らになって最終音節でさらに急上昇するものがある。日本人の日本語でこの型は平板・尾高型名詞の問い返しに使われる。（注１）「電話？」「贈り物？」

②谷型　後ろから２音節目でピッチを下げ、最終音節で上昇させる型。日本人の日本語では後ろから３拍目にアクセント核がある名詞に使われる。「メガネ？」

③跳ね上がり型　最終音節でピッチを下げ、さらに急上昇させる型。日本人の日本語では、後ろから２拍目にアクセント核がある名詞に使われる。「花屋？」

④下降型　文末が下降する型。鮎澤(1992)の日本人の１語問い返し疑問文の分析ではこの型は見られなかったが、自問や深い疑念を表すときに使われるパターンである。

学習者の発話に見られた音調の型の使用回数を（表４）にまとめた。

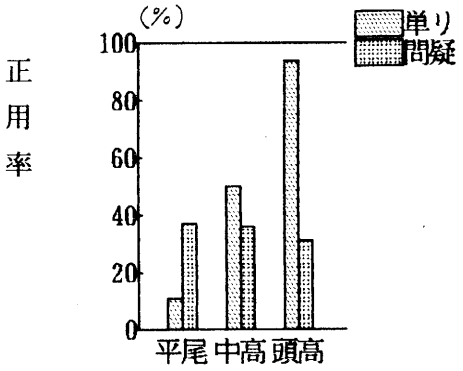
（表４）学習者別音調の型使用回数　（回）

	上昇型	谷型	跳ね上がり型	下降型
学習者01	7	7	2	0
学習者02	10	4	1	0
学習者03	1	0	15	0
学習者05	1	0	3	12

学習者03は跳ね上がり型、05は下降型というように学習者によって多用するパターンはあるが、どの学習者にも複数のパターンが見られる。特に学習者01、02 は音節数に関係なく、上昇型、谷型、跳ね上がり型を使っている。この３つのパターンは日本人の発話中に現れるパターンであり、日本人の場合はアクセント型との組み合わせによって、これらのパターンを使い分けている。しかし、学習者の場合はアクセント型との組み合わせとして、適当でない場合が多い。学習者は、日本人の問い返し疑問文の音調を耳にしていて、表層的にこれらのパターンを真似ている可能性がある。

2.2.3 単語リストと１語問い返し疑問文中の名詞アクセント正用率比較

単語リストと１語問い返し疑問文における名詞のアクセントの正用率を（図４）に示した。



アクセント型別発話数

平板・尾高型	38
中高型	56
頭高型	32

＊ このグラフでは平板・尾高型を平尾型とした。

（図４）単語リスト及び１語問い返し疑問文中の名詞アクセント正用率

平板・尾高型アクセントは単語リスト中の名詞では正用率が11% だが、疑問イントネーションがかかった発話では、正用率が37% に上がる。逆に中高型、頭高型アクセントでは単語リスト中の名詞の場合は正用率が高いが、１語問い返し疑問文では正用率が低くなる。特に頭高型アクセントでは94% から31% に減る。単語リスト中の名詞では、アクセント型による正用率の違いが大きいが、問い返し疑問文では、どのアクセント型も同じぐらいの正用率である。

2.3　文環境、イントネーションの違いによる、アクセント正用率比較

2.2 では、単語リスト及び１語問い返し疑問文中の名詞アクセントの正用率を比べたが、ここではさらに文中に置かれた名詞「（　　）の写真。」、文末に置かれた名詞「あれは（　　）。」の分析結果を加え、４人の学習者のアクセント型別正用率を比較する。（表５）

（表５）学習者４名のアクセント型別、名詞の音調の正用率(%)

アクセント型	単語リスト（　）	文末 あれは（　）	文中 （　）の写真	問い返し（　）?
平尾型	11	11	37	37
中高型	50	57	36	36
頭高型	94	88	63	31

単語リスト、文末の名詞においては、平板・尾高型アクセントの正用率が低く、頭高型アクセントの正用率が高いが、文中の名詞、問い返し疑問文においては、平板・尾高型アクセントの正用率が少し上がり、頭高型アクセントの正用率が下がる。中高型アクセントに関しては、それほど顕著ではないが、頭高型アクセントに似た傾向が見られた。

つまり文環境、イントネーションによって、名詞アクセントの正用率に違いが見られることが、明らかになった。

2.4　アクセントの習得

もし、ある名詞のアクセントが習得されているとすれば、それはどんな文環境にあっても、またどんなイントネーションがかけられても、アクセント型が保持され、発話中の音調に観察されるはずである。今回分析した、単語リスト及び４文いずれの場合にも、100%適切なアクセント型が観察されたのは以下の３つの名詞についてのみである。

学習者01：外交官・高等学校
学習者03：ねこ

これら３名詞は、音節数、アクセント型共に共通点が見られないが、１つ言えることは、平板型ではないことである。また滞日歴を見ると、学習者01は14年、学習者03は4 年であり、ほかの２人の学習者に比べて長い。しかし、本当に習得されているかどうかについては更に調査してみなければわからない。

3. 考察

3.1 アクセントの意識

フランス語の干渉により、フランス人学習者には、アクセントの意識を持つことが難しいのではないかと予想された。今回の調査により、フランス人学習者の音調の多くが、文環境やイントネーションによって変化していることが観察された。しかし、わずかな例であるが、2.4 で述べた様に、２人の学習者の３つの単語に関して、どんな文環境でも100%音調が適切であり、アクセントが習得されているらしいことが、観察された。

また、アクセントが習得されていないと言っても、発話する度に音調が変わってしまうということではなく、同じ文環境に置かれた同じ単語は、（図１）に示したように、同じ音調で発話されることが多いことがわかった。

3.2 教育の観点から

学習者はアクセントにさまざまなイントネーションが加えられた音調を耳にし、その表層構造をとらえて、音調を全体として習得しているらしいことが観察された。例えば、１語問い返し疑問文において、学習者はアクセント型との組み合わせでできた音調パターンを聞き覚えるが、アクセント型を意識して、分析的に習得していないので、そのパターンを使用するときに、アクセント型とマッチせず、不適切な音調になってしまうというような例が観察された。

しかしイントネーションの加わったさまざまな音調を聞いて、個別にそれを学習するのは、経済的ではない。

ある単語のアクセントを教える際には、その問い返し疑問文、文中、文末での音調も提示し、アクセントとイントネーションの関わりを、同時に指導する必要があると考えられる。またそのような指導により、学習者は、イントネーションのかかった音調を聞いて、逆に単語のアクセントが類推できるようにもなり、自律的な学習が可能になると思われる。　（注２）

また、フランス人学習者のアクセントの習得を見るときに、特定の文環境のみで調査しても、習得しているかどうかは分からない。文環境、イントネーションによって、正用率が大きく変わるからである。さまざまな文環境、イントネーションのかかったもので、調査しなければ、アクセントの習得を見ることはできない。

4. おわりに

フランス人学習者の名詞アクセントは、予測①のとおり、文環境やイントネーションによって影響を受けており、文中の名詞、及び1語問い返し疑問文においては平板化の傾向が見られ、単語リスト中の名詞及び、文末の名詞では、最終音節が低くなる傾向が見られた。また、予測②については、予測とは違い、同じ文環境に置かれた同じ名詞の音調は、かなり固定していることがわかった。

今回の調査により、フランス人学習者の発話における名詞アクセントの、だいたいの傾向がわかった。今後は、名詞以外の品詞についても、同様の調査を行って、フランス人学習者の音調の傾向を探り、さらには、そこで得られた知見を、フランス人が発話しやすい音調、しにくい音調は何かということを考慮した、アクセント、イントネーション教育の教授法や教材の開発に結びつけていきたいと思っている。

この研究は文部省科学研究費補助金総合研究（A）「日本語教育のための韻律特徴の対照言語学的研究」(No.05301104)（研究代表者杉藤美代子）の研究成果の一部である。

[謝辞] 本稿をまとめるにあたり貴重なコメントをいただいた鮎澤孝子先生、西沼行博先生に、心より感謝いたします。

注1) 日本人日本語発話においても、個人差はあるが、句頭上昇の後一旦平らになり、最終音節で急上昇するもの（4拍、5拍名詞）と漸次上昇するものの2種類が観察されると鮎澤・谷口(1991)に報告されている。

注2) このような学習により、学習者がアクセントを内在化させることができるようになるかどうか、今後の縦断研究が待たれる。

[参考文献]

1.鮎澤孝子・谷口聡人(1991)「日本語音声の韻律的特徴」、『日本語の韻律に見られる母語の干渉－音響音声学的対照研究－』、文部省重点領域研究「日本語音声」D1班研究成果刊行書
2.鮎澤孝子(1992)「日本語の疑問文の韻律的特徴」、『日本語の韻律に見られる母語の干渉(2) －音響音声学的対照研究－』、文部省重点領域研究「日本語音声」D1班研究成果刊行書
3.鮎澤孝子(1993)「外国人学習者による日本語の質問文のイントネーションの習得過程」『日本語音声と日本語教育』、文部省重点領域研究「日本語音声」D1班研究成果刊行書
4.鮎澤孝子(1994)「フランス人日本語学習者の疑問イントネーションの習得」『第２回国立国語研究所国際シンポジウム第２分科会「日本語教育のための音声の対照研究－日仏語の音声の対照研究－」予稿集』
5.今川博・桐谷滋(1989)「DSP を用いたピッチ、フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」、『電子情報通信学会技術報告』、SP 89-36
6.中川恭明・中川千恵子(1993)「フランス人学習者の日本語に見られる母語の韻律の干渉」『日本語音声と日本語教育』、文部省重点領域研究「日本語音声」D1班研究成果刊行書
7.中川恭明・法貴則子(1994)「フランス人日本語学習者のアクセントの習得」『第２回国立国語研究所国際シンポジウム第２分科会「日本語教育のための音声の対照研究－日仏語の音声の対照研究－」予稿集』
8.西沼行博・ダニエル・ハースト(1994)「韻律干渉のパラメータの対話的操作の試み：仏人日本語学習者のデータ分析」『第２回国立国語研究所国際シンポジウム第２分科会「日本語教育のための音声の対照研究－日仏語の音声の対照研究－」予稿集』
9.法貴則子(1994)「フランス語母語話者の音声面における習得過程」お茶の水女子大学大学院日本言語文化専攻平成５年度修士論文

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科１年)